
海老の尾はどのような夢を見るか

市場良子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海老の尾はどのような夢を見るか

【Nコード】

N1395S

【作者名】

市場良子

【あらすじ】

この話は静かな高校生活の一片を切り取ったものです。島津、神宮寺、多田、俺、、、、癖に囚われた彼ら。

高校の卒業記念に書いたものですが、スケジュールの都合で配布は無理でした。ですが腐らせるほど余裕があるわけでは無いので…

私はこれを短編小説だと思っていますが、いくつかの理由で区切

ついでに。

前編（前書き）

驚くほどストーリーが薄い一点をじっくり承ください

前編

海老フライの尾を食べる奴が知り合いにいるのだが、結構な悪癖だと思わないか、と放課後のとある空き教室で俺の友人である島津がそう言った。

顔を少しずらすと、教室の隅で赤い自己主張が始まっているのが見えた。長く続くほど、そして激しいほど、教室を覆う寒気は耐え切れずに逃げ出すのだ。その未来の暖かさをこの場にいる数人の友人らと空想していたときに、先の一言が漏れたのである。

許せる癖と許せない癖があるよね。例えばほら、ぺん回しは誰も気に留めないけど、貧乏揺すりは目についちゃうよね。しつげが悪いつて感じ。そう言ったのは寒さのために腕を組んで身を縮ませている多田である。繋がっているようで、若干ずれていないだろうか。推論だが、と一つ置いて発言したのは俺の真正面にいる神宮寺である。相変わらず携帯から目を離さずに次のように語った。

癖を見れば育ちの良さがわかる。さつき多田が言った貧乏ゆすりと言うと、あれはホラ、膝を細かく揺らすじゃないか。あれは体を温める防衛機構だ。とどのつまり、まともな暖房が無かった頃から受け継がれてきた貧困層の特徴なんだよ。ホラ、火鉢ってあんだろ。歴史の資料集で見たるあんなもんでまともに暖められるか？違うね。特に東北は大変だったろうな。逆に富裕層は違う。いくらでも手段を持っている。あいつらブルジョワは膝を揺らす必要がないんだよ。長い。神宮寺の話は長い。ともかくにも長い。反論を試みても良いが、議論するつもりで島津も神宮寺も言っているわけではないだろう。とりあえず、現代においても貧乏揺すりが見られる事に関して遺伝だからというのは短絡的でないか、そもそも豊文化の昔の家屋でどう貧乏揺すりをするのか、といった疑念の言葉を飲み込む。

神宮寺の発言以降、場は元の雰囲気に戻った。島津が発言するまでの、各々が自由に過ごしていたあの雰囲気である。携帯をずっといじっている神宮寺、寒さに打ちひしがれている多田、SF小説を読み始めてから絵画の如く動かない島津。それぞれが今やっている事の片手間に、先のやりとりがあつたのである。俺と言えば、手元にティッシュを広げて先の丸い鉛筆をカッターで削っていた。段々と熱気が身体を包むのを感じながら俺は、何を言うべきか思案した。刃で鉛筆の身を削りながら。白い紙の上に、鉛筆の鱗が黒い灰と共に落ちる。落ちる。落とす。

集中していると癖が際立つような気がする。授業の時に回りを見ているのも面白いかもな。そう言つと、惰眠を貪っていた彫像たちは一斉にこちらを見た。

その日の夕方から雨が降つた。でも、夜中の間に止んだ。

玄関を出て最寄の駅に向かう。太陽不在の、青い空。乾きを願うコンクリートを滑らないよう、注意深く踏みつけて進む。下を向いていると、電柱が雫を垂らしてきたので、ガンをつけた。

十字路を曲がって駅が目に入った時、背中を叩かれた。

今日は自転車じゃ無いの？ああ、雨上がりだしね。

多田だった。水溜りが嫌なんだと俺は言った。

多田を待たせて切符を買う。学校までの料金は往復で三百二十円だ。

駅の構内にある蕎麦屋の看板を見ていた多田の背中に、マックポークが三つ買えたと言つ。

改札を越えて、電車を二人で待つ。

急に、癖の話覚えてる？と多田が言った。

無くて七癖、って言うけど、意識してみると本当に癖は多いね。

雨が降つた後は電車登校、切符を買つとき後ろを一度振り返る。マックポーク換算。三十分も経ってないのに、こんだけ見つけちつた。

ドヤ顔に反論をぶつける。癖というのは無意識の習慣だ。雨上がりに電車で登校するのは根拠ある行動だつーの。切符を買う時後ろを確認するのは、待たせている人がどれだけいるかどうかのチェックで気遣いの一つ。マックポークは言葉遊びだろ。

言い終わると清清しさが身体を包み、今日一日が良い日になると言われた様な気分になった。

それこそ無意識の習慣かな、と多田が言う。何が、と俺は言う。

無茶振りにガチ反論。それだけ言って多田は黙ってしまった。

今日は良くない。そう思っただけでしばらく経った後、轟音を伴って電車が俺たちの前に現れた。

教室の椅子に座ると同時に、チャイムが鳴った。

自転車で登校すると息絶え絶えで席に着くじゃねえか。今日は電車か？と前の席の神宮寺が身を捻って俺に言った。

いいから前向けや、先生の話をもっと聴くしろ、と俺は姿勢を戻すことを要求し、それが成功した後、本を読み始めた。

朝のHRが終わって授業の準備が宣告されたことを教室の雰囲気です察するが、俺は中々、本を閉じることが出来なかった。

おい、初っ端体育だからいい加減にしとけよ。島津の声が後ろから聞こえた。俺は上半身を捻って島津がジャージを片手で持ちながら、教室の扉を開くのを見た。

俺は動かない身体を叱咤しつつ、廊下に設置されているロッカーに向かおうと、教室の扉を開いて出た。

ネクタイを緩めてから準備するのは意識してるのか？俺の背中に神宮寺の声がかけられた。

前を向いたまま、手を背中側にまわして扉を閉める。一息ついて首もとに手をやる。ネクタイは大きな輪を作ってぶら下げられている。なるほど、今までずっとこうしていたのか、原始的な部分である脳の中樞が沸騰するように熱を持つのを、俺はどこか他人を見る

ように観察していた。

スリーポイントを外す。体育館の床がこぼれたバスケットボールを跳ね上げる。確実に入る距離まで接近を試みるのがお前の主義じやねえのか、と対立チームに属する神宮寺が俺に発破をかけた。

バウンドしているボールを無視して、センターに立つ同期にある程度近づく。

それじゃー行くぞー。間の抜けた教師の一声は端に設置されているタイマーを管理する係りに届いたようで、大きな電子音が響いた。同時に、同期が二人、中央で跳ぶ。

口火を切るジャンプボールは味方の勝ちだ。それを確認してすぐに相手陣地を出鱈目に縫うように駆ける。相手の視線や網を通り抜け、パスがしやすい環境を作る。

立ちふさがる障害相手にボールを持つ同期は、速度を緩めながら、簡単なフェイントでミスを誘発しようとする。うまくいかない。

どう行く？

突破を諦めた同期の視線はあちこちに動き、逡巡。自然と腰が下がる。

まさか。

行く先を阻む相手もそれに合わせて腰が下がった。

そうか！

その一瞬。体勢が下がっていた同期はバネのように身体を跳ね上げた。

ボールは鋭い勢いで籠に肉薄する。

弾かれた。

気にすんなやー！どんまい！惜しいよー！

あちこちから声が拳がった。

相手陣営に渡るボール。

いきなり！

大きく振りかぶってロングパスだ。

対応が遅れたのか、相手の先読みが優れているのか、よくわからないが少なくとも、ゴールの元で待ち伏せしていた一人がうまく受け取ったことは事実だ。

伏兵の一撃。

なあ、バスケってオフサイド無いん？と同期が俺に言う。

バスケに興味が無いから知らんね。でも、向こうだってゲームの楽しみ方はようわかっているはずだから今日は二度とねえよ。俺は同期にそう返した。

中編

籠の下より試合は再開。

適当にバスケットの下から味方に球を回すと、間髪入れずに返された。反射的に俺はフィールドを見回す。すぐにドリブルを開始。目から入る情報を瞬間で処理しながらゆっくり進んで相手を焦らしてやる。避妊は任せろ、という味方の掛け声に思わず笑って手元が狂いそうになる。

神宮寺が真っ直ぐ向かってくる。俺が相手だ！と元気いっぱい宣言戦布告から仁王立ち。

俺は加速した。神宮寺の立ち振る舞いに変化が見られるが、それでも若干タイトに近づき、寸前の所で味方にパスをした。

しばらくの間は神宮寺のチームが優位に立ち、ゲームを動かしていた。戦力の不平等に味方連中は嘆いている。だが、主観的にはよろしい。俺は過程を重視することをネクタイの件で決定したためだ。数回に及ぶ神宮寺のブロックを俺は避ける。

逃げてると良くないのが伝染するぞ！と神宮寺は言う。

俺はこの試合の流れを、個人的には満足だと思う。神宮寺に少しばかりやり返すためにだ。

こちらのバスケットの下を、こぼれ球がくぐってエンドラインから外れそうになるところを、無駄に同期が追って俺に回す。

咄嗟にコート外のタイマーに顔を向ける。与えられた時間と張り続ける伏線のインパクトを考慮するに、今が実行に最適と考えた。センターサークルにゆっくり近づく。

外野から神宮寺対応しろ！と声がかかる。

とても良い状態だ。

期待通りに、神宮寺がむかってくる。

近くの同期に目配せをした。今更何よ？と言いたげな同期だったが、すぐに顔からは消える。

レッグスルー、足の間で球をくぐらせる技術の多用で演出を兼ねた時間稼ぎをする。

ついに来たぞ！神宮寺やべえ！神宮寺死んじゃう！神宮寺の息が無いぞ！

どれだけみんな神宮寺嫌いなんだよ。やっぱあれか。話長いからか。

視界の隅で、目配せをした同期が敵陣営にさりげなく入り込むのを見た。俺のパフォーマンスで前線が上がってきたので、やりやすかったろう。

島津なら看破しそうだな、と思う。

俺の予想では、見抜けた俺らチームやべえだろ！と神宮寺は思っ
はずだ。

そう。神宮寺は考える人間だ。俺はその長所を弱点と解釈する。
いよいよ俺は接敵する！

やはりというか、相手の何人かは俺と神宮寺のタイムンを見ているフリをしている。

それでいい。俺と神宮寺から意識を離せ。

飛び込む！右脇へ！

神宮寺の反応！

そして、相手のスリーポイントライン近くのサイドラインにいる、
潜り込ませた同期周辺の獣臭さが濃くなった！

両手を大きく広げて体を捻りながらブロックする神宮寺の動きは
どこか怠慢だった。明らかに、後でドヤ顔をしてこう言っつもりだ
ろう。お前の策なんかわかってたぜ！と。

残念やったな。

神宮寺の足の間でボールをねじ込む。サッカーの股抜きの要領。
とは少し違うか。

潜伏した同期に意識を向けてた相手連中は反応が遅れる。
バスケットにいよいよ近づく。

スリーポイントラインから敵が対応、より加速して単騎駆け！
阻まれて失敗。
を演出する。

フリースローラインを目前に、進路を変更。大きく迂回してちょうど潜り込んだままの同期の反対側に位置した。

さも失敗した！という様にレッグスローで後退。

味方はボールの救出のため俺に近づき、敵もボールの奪取でパスに警戒しながら突っ込んでくる。

引っ掛けの策を弄するも失敗した俺に対する注目度は圧倒的だった。

だからこそ。

ボールを持つて大きく飛び上がる。

ただ一人。

相手の網に潜り込ませた同期は、相変わらずそこに居た。

後の流れは簡単。

圧倒的な速さのドリブルから、まさかのダンク。

すぐに全体の俺に対する関心が薄くなる。それでいい。

これを癖と言つのは疑問だが、神宮寺を避ける行動を無意識だと見せかけた。

途中で同期への目配り。

相手の警戒心を煽り立てる。

神宮寺を避けるのは一つの複線で罨じゃないか？

そう思い込ませてやった！

以降は普通に試合を楽しんで、普通に試合に負けた。やっぱり神宮寺のチーム強いわ。

トイレで着替え終えて教室に戻ると、両腕を寒そうに組んでいる多田と、ブレザーを着ずに暑そうなワイシャツ姿の島津が居るので、

遠くから声をかける。

体育直後に寒そうなのは引くわ多田。てか島津どんだけ気合入ってるねん。すると、多田がぴょんぴょん跳ね飛ぶように向かってきた。

俺は動揺するも冷静に、多田のタツクルを受け止める。

島津がさあ、超機嫌悪いの。いや多分だけど。なんかさー、バドミントンで一方的にハネをぶつけてきたのー。試合になんねーよ！それを聞いて俺は多田を押しつけ島津に近づく。

あれっしょ。授業変更で数？があるのが原因っしょ。ていうか多田に八つ当たりはないっしょ。謝れ！そう言つと島津は普通に申し訳ないと多田の方に顔を向けて言った。

島津には悪いが、俺は数学が楽しみだった。昨日の放課後に俺が言った、集中すると癖が際立つんじゃないかという予想のこともある。

予鈴を楽しみにしつつ、自販機で飲み物を買ってきた神宮寺とバスケの話をしたり、島津の横暴を多田から聞かされて休憩時間を過ごした。

そろそろ授業の予感、と思いい席に着いて準備を始める。同時に、教室の前の扉から禿げの男性が顔を出した。

最前線中央の席でぐっすり夢の国の島津には一切触れられず授業は開始された。これまで数学の教師に恵まれたことは無かったと島津は言うが、この禿げは親切かつ丁寧な教え方が出来る。性格に難があるのは十分許容出来る。

今日も独特な節が展開された。

まあはつきり言つてこの学校のレベルは低いと言わざるを得ないのですが・・・ねえ神宮寺聞いてた？ねえ聞いてた？いやお前の返事はいらねーんだよお前さつきからずつとシャーペンかちかちかかち何なの？嫌がらせ？随分ソフトですね？かちかちうるせえんだよいい加減にしるよこの野郎・・・えー失礼しました。この例題ですが、引っ掛け問題なので教科書通り、テンプレート通りでは時間

がかかるでしょう・・・

必死に文字を書き連ねる。速度は速く、難度も高く、これで教え方が悪いようだったら俺も夢の国だ。

講義の終了を宣告される。この後は実践と称して各自でプリントの問いを解くことになっている。

すぐにノートの清書や周りの整理に取り掛かった。消しゴムの力をこつそりと机の角から落とし、教科書を仕舞うことである程度のスペースを確保。筆箱も机の中へ。この過程だけは省略できない。いつも自然に、何も考えず行う。これが癖かもしれない。いやきつと、癖だろう。

中編（後書き）

このような教師は実際にいました。
私は尊敬していました。媚びない姿勢と教師としての才能に。

後編

広くなった机の上にプリントを開き、真剣に取り組む素振りを作る。それでも一応、問いの内容から解答へのプロセスを大雑把に思い浮かべる。何のための予防線なのか、自分でもよくわからない。

一瞬、視界の隅で動きがあった。

いや、当然、ここには40人前後が押し込められているのだから当たり前なのだが、それでも、『動きがあったと思わざるを得ない』ほど、気にかかった。

視線を手元から起こして見回す。特に何かがあるわけではないが、寝ている島津の辺りが心に引っかかる。結局、目立つ何かは発見されなかった。

顔を手元のプリントに向ける。筆記用具を持つ。偽装を施し、辺りの観察を開始する。

奇妙と言ってもいいほどに、島津を除いた全員が結束して勉強に励んでいる。普段は授業を蔑ろにする者や、道楽で来ているんじゃないか？と思わせるほどに授業の進行を妨げる奴ですら、この時間、いや、あの教師の授業となると本気を見せる。

嘗め回すように目を動かす。

息を吹きかけてから眼鏡を拭く奴・・・ペンを回す奴、しかもあまり見慣れない超テクニクで・・・前に垂れた紙をうつつとしそうにいじる奴・・・実はこっそり、携帯見てた奴・・・

これだけの人間を見るだけでも中々にせわしいな。そう思った次の瞬間に、一つのアイディアが頭に根を伸ばした。

それらは癖なのか？

その言葉を認識すると同時に、俺は興味を失った。

興ざめだった。

癖というのは、もっと無意味で知覚していない何か・・・

もう駄目だ。問題でも解いていよう。

軽く息を吐き、紙上を走る関数の問題に着手する。

ミスリードを含めた、失敗を誘う問題文と前衛芸術のような数字の群れに青い闘志を伴い挑む。問題の難度は特A級だと俺は感じる。そういえば、あの教師が出す問題には過去問集などには既存しない問いがちらほらと存在する、と島津から聞いたことがある。

あの教師は迷惑なことをする、と言う島津にその時反対の意を示した。普段の教え方といい、俺には生徒への期待という風を感じるのだ。島津は良く調教されているな、と返した。

少し書いては考え、少し考えては書く。プリントに書き付けたプロセスを目で追う。

首と背中に粘性の疲労が少しずつ乗っかかる。

一門解くのに払う体力リソースが大きい、これは俺が慣れていないからだ。闘志の炎は消える気配を全く見せない。

答えと計算過程の見直しをしてほつと安堵する。俺は目に見えない疲れを振り払うように、姿勢を良くして固まった筋肉をほぐそうとした。

姿勢を正しながら頭を上げて、腕を・・・

ぞくり、とした。

島津が身を捻ってこちらを見ていた。

冷や汗が危険信号を散らしながら背中を走る。

教室の静けさが大きな威圧となって耳から頭の中へ。

姿勢は正したのに、身体は萎縮している。

ひねり出すように島津を指差す。どうかしたのか、という意味だが、果たせるかな、島津は何でもない、と言うように顔を横に振って、再び寝始めた。

調子に乗って深淵に身を乗り出したせいなのか、俺は深淵から見られるはめになった。とある哲学者の有名な言葉が頭の中で繰り返される。

俺は授業の終了を知らせる鐘の音を聞いた。

去る教師を見送る。静かに扉は開けられ、逆に荒々しく扉は閉められる。

教室を覆う青い炎は緩み、何人かのクラスメイトが集中していたことの反動で、他の教室や化粧室へ、圧力から開放されたバネのように飛び向かう。先の完璧に近い授業風景とは正反対の状態となった。押さえつけられていたことの反動でほぼ全員がアクティブな行動を見せる中、確認出来るだけでも俺と島津は暗かった。

手元に視線を寄越して後片付けを行う。ある程度机の上が整ってきたところで、机の角に手を置かれた。何かを主張したいこの手は多田だ。

無理。雰囲気呑まれてさあ、癖を見ようとする気力が削がれたわ。結局、いつもと同じようにプリントと合戦じゃー。多田の明るい言葉の端々に、惜しいと思う気持ちが込められていた。

俺は見たぜ。普通だったけど。普通の景色だったけど。あまりにも単調過ぎて即で飽きた。神宮寺が前の席から振り向きもせずにもう言ってきた。

癖ブーム終了の予感、と俺が言うと多田は、いつ流行ったよ？と突っ込みを入れた。この何でもないやりとりで心が洗われるように落ち着いた。

実際さあ、俺ら癖を意識しすぎだけど、何なのこれ。神宮寺は背もたれを抱えるような姿勢に変えつつ、俺の顔を見据えてそう言った。

確かに、早朝から癖というものに一喜一憂して、非常に何か、変な気がする。

今日一日引つ張られるかもな、とさりげなく多田が言う。何でもない発言のはずなのに、どこか空恐ろしい力を伴っていた。

ふいに、中身の分からない箱を疑心暗鬼でこじ開けようとする俺

たちの姿をイメージした。

誰の不安が伝播したのか、静かになる。
よろしくない。

湿気た雰囲気だな、と鋭さを伴いつつも暖かさを感じさせる声が聞こえた。

島津だった。

そういえば俺には何か癖があったか？授業中に見られたらどうか？と反射的に考える。だが、この思考に至る時点ですでに悪いサイクルに飲み込まれていることに気づく。

いきなり、島津は俺の机に座った。

少しの間沈黙した後、反省しろと島津は言った。

海老の尾を食うのは悪癖だ。米粒を残すのも良くない。だが、蓼食う虫も好き好きという言葉がある。

つまり、癖にこだわり過ぎなお前たちが面倒臭いと言いたいのだな。そう俺が言うと、島津はデコピンを仕掛けてきた。

十人十色。そう言って島津が教室から廊下へ消えていくのを、おでこの痛みには耐えながら見送った。

数学の後はどっかへ消えるよなー、と俺はいいかけてやめた。

悪循環の螺旋を断ち切る機会を島津がくれたのだ、多分。

あいつが戻ってくる前にいつもの雰囲気させねばならんな、と思っただとところで多田が短い悲鳴を上げる。次の生物、俺終わったわ。課題に一片も手をつけてねえよ・・・と多田が言う。たいていやつてこないじゃねーか、と俺が言うことは、決して無い。見せてやってもいいが、何らかの見返りは期待してもいいよな？と俺は言う。けちくせえ、と笑う神宮寺に苦い面の多田。

傍から見れば、いつものメンツがいつもと同じように馬鹿を話し合っていると思うだろう。だが、俺は迫りくる不幸の伝染を必死に払うように、精一杯声を明るくして前の二人と話している。

後編（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

誤字脱字ありましたら報告をお願いします。

あと・・・！読みやすかったかどうか、感想頂けたらな・・・！

みたいな。

とにかく、読了ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1395s/>

海老の尾はどのような夢を見るか

2011年4月10日09時10分発行